服部良一の回顧展が中之島で
よみがえるメロディ、ブギのリズム

学生たちと、コロナ禍では中断していた懇親会でカラオケへ行き、NHKの朝の連続テレビ小説「ブギウギ」にちなんで、笠置シヅ子の歌でヒットした服部良一（1907～1993）の「買物ブギー」を歌ってしまった。ドラマでは、草彅剛さんが「羽鳥善一」の役名で演じているのが服部良一である。

「買物ブギー」は、落語「ないもん買い」に触発され、「村雨まさを」のペンネームで作曲者自ら作詞した曲で、昭和25（1950）年に発表された。戦後復興期のエネルギーもたぎり、日曜の朝から*「盆と正月いっしょに来たような、てんてこ舞いのいそがしさ」*や、買物たくさん頼まれ、*「わてほんまによー言わんわ、あーしんど」*で終わる歌詞が笑いのツボにはまる。「この曲は大阪人の一般教養やで」と学生諸君に思わず宣言したくなる、ノリノリのブギウギである。

「買物ブギー」楽譜の表紙

ジャズをとりいれた服部の感性は洗練され、卓越したメロディーメーカーでもある。「別れのブルース」「蘇州夜曲」「一杯のコーヒーから」「山寺の和尚さん」「東京ブギウギ」「青い山脈」「銀座カンカン娘」などの名曲を残した。「ラプソディー・イン・ブルー」で知られるアメリカの作曲家ジョージ・ガーシュウィン（1898～1937）にちなんで、服部を「日本のガーシュウィン」と音楽好きの知人は呼んでいる。

自伝『ぼくの音楽人生』（日本文芸社、1993年）によると、服部は大阪に生まれ、大阪市立生魂小学校を卒業後、大阪市立実践商業学校に通うが、千日前の鰻料理店の「いづもや」が宣伝のために結成した「出雲屋少年音楽隊」に参加する。

服部は道頓堀と縁が深く、同じく連続テレビ小説「おちょやん」（2020～2021年）に登場する中座東側の楽器店のモデル、今井楽器店でも楽器や楽譜を購入する。戦後、楽器店は飲食店にかわって、うどんの名店「今井」となるが、うどん店の芳名録「今井帖」にもサインがのこされている。

大正15（1926）年、服部はラジオ放送用に結成された大阪フィルハーモニック・オーケストラに入団し、フルートを担当し、指揮者であったエマヌエル・メッテル（1878～1941）から音楽理論や作曲、指揮を学んだ。メッテルはロシア革命で亡命したウクライナ人の音楽家である。大阪フィルハーモニーの音楽総監督の朝比奈隆（1908～2001）も同時期にメッテルに学び、1970年の大阪万博の成功を踏まえて服部が作曲した「おおさかカンタータ」は、朝比奈指揮の大阪フィルハーモニー交響楽団・合唱団が初演した。

ジャズが敵性音楽とされた戦時下、服部は中国に渡って上海交響楽団の指揮もしたが、戦後も数々の名曲を発表し、服部ゆかりの東平地域コミュニティプラザ（大阪市中央区上本町西）には、「青い山脈」の楽譜が彫られた記念碑が建てられている。

歌碑は道からフェンス越しに見ることができる。

さて、この2月20日から3月9日まで（月曜休館）、大阪大学中之島芸術センター（北区中之島4丁目）では、展覧会「服部良一・笠置シヅ子展：花開く大阪の近代音曲」を開催する。芸術センターは、大阪中之島美術館の西どなりにある大阪大学中之島センターにあり、大学施設なので入りにくそうだが、そんなことはおまへん入場無料、気楽にご来館ねがいます。施設内にはカフェもあり。

展覧会を企画するのが、昨年『昭和ブギウギ―笠置シヅ子と服部良一のリズム音曲』（NHK出版新書）を刊行したばかりの大阪大学人文学研究科の輪島裕介先生である。絶好調の音楽学研究者で、展示室には服部家のご協力も得て貴重な写真や手書き楽譜（複写）資料のほか、笠置の衣装の360°映像（プロジェクション）が公開される。

イベントは、2月25日「水都ブギウギ今昔：大実演会」（有料）、3月9日講演会「昭和ブギウギ伝説：道頓堀から日比谷まで」。

そこでOne more time!!　なにがでるやら、期待のリズムにのって乞うご期待!!　*詳しくは大阪大学中之島芸術センターのホームページからよろしく。*

筆者プロフィール

橋爪 節也　はしづめ せつや

大阪大学名誉教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室（現・大阪中之島美術館）から大阪大学総合学術博物館に移った。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葭堂―なにわ 知の巨人―」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ―増殖するマンモス／モダン都市の現像―』（創元社）など。